

令和6年度学校教育の努力点とその推進計画

1 研究主題について

「自ら、ともに、学びを深める正色っ子」



2 主題設定の理由

令和3年度から「自ら、ともに、学びを深める正色っ子」をテーマに、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指し、個別学習とプロジェクト型学習に取り組んできた。「ナゴヤ学びのコンパス（学びの方針）」においても、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実は重要とされており、本校の努力点研究は、今日的な課題の追究となるものと考えている。

さて、昨年度の実践は、個別学習（ドンドンクエスト）とプロジェクト型学習（プロジェクトS）を二つの柱とする取組の3年目として、個別学習では、自由進度学習の実践を各学年で行った。NINO（認知能力検査）を取り入れ、個々の児童の実態を把握し、学習指導に生かした。実践を積み重ねることで、自由進度学習の進め方についての児童の理解が深まり、学習に対する意欲が高まったり、一斉授業のみより、達成感を得られる児童が増えたりした。児童同士での教え合いも身に付いてきており、特に高学年では、自分に合った学習形態を選ぶことができるようになってきた。また、「ドンドンカルテ」を作成することで、児童が学習の見通しをもつことや自身の理解度やつまづきを把握することができたという点で効果があった。

プロジェクト型学習では、昨年度と同様、総合や国語、学活で前期の実践を行った。代表授業を参観することで、より児童のわくわく感を高め、学習意欲につなげていく実践ができるように職員の研さんを積んだ。どの学年においても、タブレットPCやプレゼンテーションソフトを積極的に活用し、児童自身の活用スキルが向上した。高学年になるほど、調べ方やまとめ方への習熟が見られ、ロイロノートやCanva（キャンバ）Kahoot（カフート）などのアプリケーションを、自分の表現したい内容に応じて使い分けていた。また、評価会議で児童同士アドバイスし合うことで、さらに良いものへと練り上げていく様子が見え、効果がえられた。

しかしながら、個別学習では、学習の振り返りにおいて、児童自身が、自分の理解度を正確に把握できておらず、理解できたつもりになっていることが多いという課題が残った。また、児童の実態によって、自由進度学習が適さない単元もあることが分かった。プロジェクト型学習では、授業参観を行ったものの、保護者に、取組の途中経過や、児童の成長がうまく伝わっていないという課題が残った。

そこで、今年度は、努力点研究の4年目として、以下のように実践を行う。個別学習では、昨年度の実践で、単元の途中で小テストを行うことで、集中して学習する意欲が高まり、学習内容の理解度が向上した学年があった。そこで、全学年で小テストを行って、「ドンドンカルテ」に反映することで、児童の理解度を、児童自身と教師が正確に把握できるようにする。児童自身が最適な学習を選ぶために効果的なように、小テストの問題数や、行うタイミングなどについて、研究を進めていきたい。プロジェクト型学習では、児童の発表の質の向上と、保護者への発信をより充実させるため、11月の授業参観で、保護者をアドバイザーとして中間発表を行う。どちらの取組も、ICTを効果的に活用することも続けていきたい。また、今年度からは「ナゴヤ学びのコンパス」を意識し、学習の振り返りや友達との意見交流の場面を積極的に設定し、充実させていきたい。

3 実践の進め方

4年目となる今年度は、個別学習（ドンドンクエスト）は、昨年度と同様、算数科に絞って研究を進め、2年生以上は、NINO（認知能力検査）を行い、努力点研究に限らず、日頃の学習支援の資料として活用する。**全学年で小テスト**を行い、児童の理解度を正確に把握できるようにする。また、自由進度学習の**授業スタイルを工夫**し、全単元を通じて行ったり、45分の中で一斉授業と自由進度学習の時間を設定したりする。**振り返り時間を設定**し、「学びのかいだん」などを活用する。解き方を交流したり、今日の学

習の振り返りを文章表記させたり、**自分の考えをもつ場面**を意識して設定する。

プロジェクト型学習（プロジェクトS）は、昨年度と同様、3年生以上は総合、1・2年生は生活科や国語、学活を中心に進める。どんなことをプロジェクト型学習で学ばせるのかを教師が吟味し、児童の問いが広がり、「探究したい」と思えるようなトピックを提示し、「やり遂げた」自信をもてるように支援する。トピックについては、前後期で分けるか通年か学年の実態に合わせて決定する。さらに、調べたことを効果的にプレゼンする力も育てたい。

今年度は、年1回の**授業参観（11月）**でプロジェクト型学習の実践を保護者に参観してもらう機会を設定する。**保護者をアドバイザーとして中間発表**を行うことで、児童の発表の質を高めるとともに、保護者の取組に対する理解を深めていただきたい。保護者のアドバイスを受けての**結果や変容は、2月の授業参観で教室掲示**して保護者に示す。プロジェクト型学習の進め方は、名古屋市教育センター『授業づくりハンドブック』を基本とし、学びの進捗状況や足跡が分かるワークシートの工夫をする。実践後の振り返りや児童同士の中間報告会の時間を必要に応じて効率的に確保する。各学年の取り組みは中間報告会や最終報告会で共通理解を図る。また、保護者への周知を高めるため、**努力点だより**を発行し、ホームページにも掲載する。（各担任の実践報告は、前期・後期各1回ずつ）



4 授業実践内容

(1) 授業実践について

個別学習（ドンドンクエスト）を年間通して行い、前期・後期を問わず、児童の実態に合わせて自由進度学習を取り入れる。プロジェクト型学習（プロジェクトS）の取組について、担任全員が、年間2回（前期・後期）の授業実践を行う。（1年生は、前期は、プロジェクト型学習は実践せず、「なごやっ子チャレンジスピーチ」を活用し、話し合いスキルを高める学習をする）11月の授業参観日に、学校努力点授業参観で保護者に公開する。公開する場面は、全学年中間発表の場面とする。中間発表の行い方（45分の中で、保護者が複数のグループの発表を見られるように、数回中間発表を行う・または発表は1回とし、残りは発表内容や提示物の修正などの時間にする）については、事前に保護者が分かるようにする。実践の様子については、努力点だよりだけでなく、学年だよりでも紹介してもよい。

(2) 評価計画

主体的に学ぶ態度の評価方法は、各学年の教育課程に準ずる。個別学習（ドンドンクエスト）、プロジェクト型学習（プロジェクトS）どちらの取組でも、使用したプリントや参考にした資料があれば、共通理解できるようにする。

5 学校評価の計画

- ・ 努力点に関わる授業参観を、全学年で11月に実施する。
- ・ 年度末の学校評価において、自己評価のための保護者アンケートを実施し、資料を得る。
- ・ 学校評議員会で、教育活動への意見を聞く。
- ・ 学校評価全体会、及び、努力点全体研究会で最終的な評価を行う。

6 研究の組織

